

コラム 10— 伊東祐亨司令長官と丁汝昌提督との逸話（写真）

1895(明治28)年2月、北洋艦隊の母港、威海衛を日本軍が占領し、行き場を失った北洋艦隊と日本連合艦隊が対峙します。伊東は丁提督の能力を惜しみ、投降を呼びかけますが、丁は部下とともに、威海衛が長く支えきれないことを知りつつ、最後の戦闘の指揮を執ります。だが、日本軍の猛攻に、北洋艦隊はことごとく大破し、ついに勝敗が決します。

丁は部下を守るため「艦隊と砲台兵器はすべて日本に渡すが、兵と人民の命は助けてほしい。これが嘘ではないという証拠に、イギリス艦隊司令長官に証人になってもらおう」と、降伏の使者を送ります。これに対し伊東は、書を見るなり、「証人は一切不要。私が信頼するのは、丁汝昌という一人物である」と即答します。丁汝昌は、伊東の信頼がなによりうれしく、感極まり天を仰いでしばし無言の涙に沈みました。

そして、使者として帰ってきた部下に丁汝昌は、「そうか・・・伊東提督は降伏を許してくれたか。まさに武人の本懐である。友情に本当に感謝する。しかし、国家に報いる義務をどうするか。わがこと足れり・・・」と告げると、自室にこもり毒杯を仰いで自決します。部下達は提督の最後を、伊東に報告し、遺骸をジャンクに乗せて生まれ故郷に返してほしいと懇願しました。

これに対して、伊東は烈火のごとく激怒し「断じてならぬ。丁提督といえど、アジアに久しく威名をふるった北洋艦隊の司令官である。其の棺を送るのに、一葉のジャンクを用いるとは何事か！ 港で没収した商船を使い、余裕があれば戦闘員も乗船させて帰還させよ」と一喝しました。この伊東の恩情に、生き残った北洋艦隊の部下は、声を上げて涙し、口々に感謝を述べながら帰国の途につきました。

丁汝昌の死を悼んだ樋口一葉は、「中垣の 隣の花の 散る見ても つらきは春の嵐なりけり」と愛惜をこめて、詠んでおり、丁提督の名がいかに日本人の間で知れわたっていたかが伺われます。



伊東祐亨海軍大将



丁汝昌提督